

# 日・韓両言語の重なりをめぐって

—コミュニケーションへの影響を中心に—

都 恩珍

キーワード：協力性、配慮性、積極性、主導性、重なりの分類

## 1. はじめに

Sacksら(1973,1974)は、一見、無秩序に見える日常会話を一つの社会現象として捉えた。そして、話し手の間では一つの発話順番において一人の話者が話し、何度も話し手の交代が行われているという会話の基本構造を明らかにした。しかし、日常会話を文字化してみると、常に文の終わりがはっきりしていて一人の話者の発話が完結した後、次の話者の発話が開始されるという単純な発話順番の移行を成しているわけではなく、発話の一部または全体が他の発話者の発話と重なった状態で、会話が流れていく場合があることに気づく。

Sacksらの研究以来、日常会話をめぐる研究は、様々な立場や方法で成されてきた。しかし、発話の重なりを分析の焦点とした研究はそれほど多くない。特に、日・韓語における重なりの対照分析は皆無に近い。そこで、本稿では、双方の重なりの構造を記述的に把握し、重なりのコミュニケーションへの影響を比較することを目的としている。

## 2. 先行研究と本稿の立場

Sacks & Schegloff (1974)によると、重なりが起こる原因として、順番取りシステムの運用規則の一つである自己選択の競争が起こり、同時に発話を始めることがありうるためであるとしている<sup>1</sup>。つまり、重なりは順番取りシステムの規則が運用される過程で起こる一時的なトラブルなのである。Sacksの他にもレヴィンソン(1990)、山崎・好井(1984)などは、重なりを「誤り」「妨害」「発話権の侵害」「脅かし」「話順をめぐる争い」「ルール違反」として否定的な見地で捉えている。

しかし、Tannen(1984)は、発話の重なりを会話の速度と関連したスタイルの一種として捉え、会話進行の速い流れにあいまって、話し手の連帯感や熱心さ、相手の話に対する興味、

---

<sup>1</sup> 順番取り規則：会話の基本単位を一つの順番とすると、一つの発話順番において一人が話し、話し手の交代が何度も起こる。一つの順番は、一つの単語、一つの文、一つの物語など、潜在的完結点(possible-completion-points)で構成されており、その単位の終わりそうな場、交代が行われるのに相応しい移行適切場(transition-relevant-place)で順番交代が行われやすい。そして、話す順番を会話の中に配分する規則には、次の話し手が他の話し手によって選ばれる「他者選択」と自己を次の話し手として選択する「自己選択」がある。

関心の深さを示すものとして、コミュニケーションを促進する協力的なものとしている。しかし、これらの研究は、重なりだけに焦点を当てた研究ではなく、話者交代という観点から付随的に行われた現象として重なりを扱った研究である。

一方、日本語の重なり研究においては、吉田（1989）、藤井（1995）が挙げられる。吉田（1989）は、Sacksの指摘した移行適切場で最も多く重なりが起こっていることを確認し、さらに日本語の会話の中で重なりやすいところを示唆するいくつかの傾向を観察しており、重なりの起こる要因として、会話参加者の親疎関係、心理状態、会話の運び方の癖、話題に対する関心度、談話展開の難易度といったその場の状況などを挙げている。

藤井(1995)は、重なりが発話権の維持を脅かすものであるという見解に対して、先行発話者の発話権とトピックが維持されるか否かを判断基準として設定した上で、重なりの分類を試みた。その結果、日本語では、相手の発話権を脅かすことなく、先行発話に対してトピックを変更するような重なりは少ないことを指摘し、日本語の重なりが持つ協力的な側面を考察している。

これまでの重なりをめぐる研究は、機能面での重なりの分類が成されず行われた研究、場面や対人関係との関わりなどを考慮に入れず述べられた研究、発話権利との関わりから付随的に生じる絶対評価的な現象として取り扱った研究が主流である。日常的に起こる自然な言語事象としての重なりのメカニズムを明らかにするためには、重なりそのものの事柄が統括的に把握できるような分析のフレームを必要とするのであろう。そこで、本稿では、発話の重なりの絶対的な評価を避け、話題及び話順などを判断基準とした新たな分類を提示し、その分類をもとに日・韓国語における重なりが母語話者の間でどのように相互作用しているのか、日・韓国語間の異同を考察していきたい。

### 3. 研究方法と資料

分析の対象としたのは、友人同士の電話会話である。電話の会話は対面会話に比べて、開始と終了がより明白で、一般的に話し手と聞き手が一定であり、言語外要素による影響が大きいなどの理由で、頻繁に談話研究の資料とされてきた。そして、友人同士の会話は、相手との親疎・上下関係から起因されうる話者の心的状態や談話内容などの影響を最小限にすることが可能なグループである。

調査は日本語母語話者と韓国語母語話者の各1家庭に協力を得て、一定期間自宅の電話に録音設置を設け、収録されたものの中から友人同士の会話のみを選択した。録音は、ヴォイスセンサーを利用し、自動的に開始・終了されるように設置した。協力者は、30代の夫婦で、相手である友人たちもすべて同年代である。資料は8件の日本語会話と5件の韓国語会話から構成されている。会話時間は、日本語が51分38秒、韓国語が81分38秒である。このようにして得られた録音資料は、一つの発話を一単位として文字化を行った<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> 一つの発話については、杉戸（1987）に従い、一人の参加者の笑いや短い相づちも含む一まとまりの音声言語連続で、他の参加者の音声言語連続やポーズによって区切られる毎に一発話の単位として数えた。

## 4. 重なりの分類

### 4.1 重なりの形態

重なりはどこで起りやすいのか、吉田（1984）によると、呼びかけ、名乗り、始めの挨拶、終わりの挨拶、切り上げのことは、話題の発展・展開時、句末近くまたは区切れのないところに相づちの挿入時、相手の言いかけた質問、疑問、意見、説明内容を先取る時、単に話順を取る時などに重なりが起りやすく、挨拶の重なりや相手の発話と相づちの重なり、相手の意図を察して割り込んだことになる重なりなどがある。

重なる位置の関係で、先行発話の文末で後行発話が開始され短時間の重なりが生起している「末尾型」、先行発話の途中で後行発話が開始され、先行発話の後半部と後行発話の前半部が重なる「割り込み型」、先行発話と後行発話が同時に開始され重なる「同時型」の3つに分類することが可能である。「末尾型」は、先行発話の肝要な部分で後行発話の重なりが現れることはほとんどない。そのために、後行発話者の伝達内容に対する誤解や予想失敗の恐れが少なく、相手の発話がほぼ終了に近い位置で後行発話が重なる。従って、先行発話が途中で途切れてしまい、伝達内容が不明の状態を終了されることはほとんどない。それに対して、「割り込み型」は、先行発話が途中で途切れてしまい、話題が中断されうる場合と先行発話の十分な理解の上での早期反応として行われ、話の進行の妨げにはならない場合がある。最後に、同時に話を始める「同時型」は、瞬間的に参加者全員が話し手になる、聞き手の空白状態であると言えよう。

### 4.2 重なりの働きかけ

重なりの会話内における働きかけの関係では、相互協力的な「促進型」、話題の自己選択的な「強制型」、話題や役割の保持的な「維持型」、聞き手志向的な「中立型」の4つに分けることができる。「促進型」は、相手の話をよく聞き、理解しているからこそ可能な予期行為として、話し手にとって、自分の話が相手に興味をもたらししていることを感じさせる要因になり、より意欲的に会話への参加を促進する役割を果たすものである。それに対して「強制型」は、自分が言いたいこと、尋ねたいことを優先的に発話することによって、会話参与や話題拡張などを積極的にリードする働きをするものである。相手の会話進行を促進したり自ら会話進行を主導するというような働きは、会話に与える影響力が比較的に明らかなものである。しかし、会話には会話の流れに直接的で明らかな影響を与える要素があると同時に間接的に影響を与える要素も存在する。即ち、会話内で比較的に影響力が強いと思われる「促進型」や「強制型」のみでは取めきれない重なりが観察されたため、間接的な影響力を持つ「維持型」や「中立型」を設定した。「維持型」とは、話題が変わることや役割関係の移行はなく、先行発話者の話が持続・保持されるタイプの重なりである。話し手が今話題としている話を続ける際に、聞き手の反応、特に相づちな反応に話し手の発話が重なるものである。それに対して「中立型」とは、実質的な発話による重なりではなく、単に相手の話を聞いていることをひたすら示すだけのタイプとして一層会話への

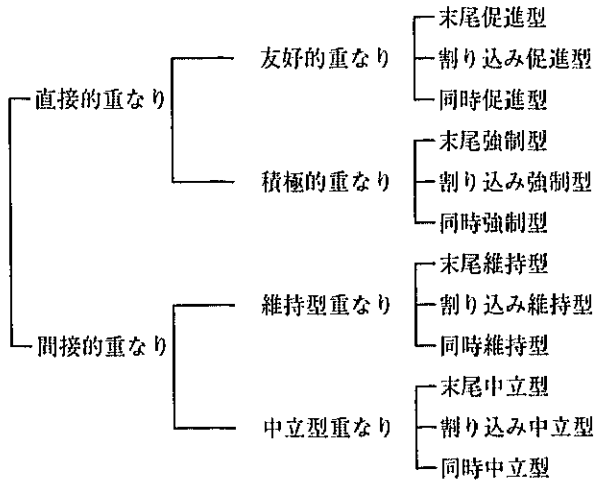
影響力が弱いものと考えられる。これは主となる発話者の発話内に収まるものであり、話し手の発話に聞き手の相づち的表現が重なるものである。強いて言えば、「維持型」が話し手としての間接的な意思表示によるものであるとすれば、「中立型」は聞き手としての間接的な意思表示によるものであろう。

#### 4.3 重なりの下位分類と判断基準

4.1 と 4.2 で述べた重なりの分類は、12 タイプで下位分類することができる。下位分類するに当たり、判断基準となる背景として考えられるのは、話題の方向性、話題の移り変わり、話順の移行、発話権の移動、参加者の態度などが挙げられるが、本稿では、話題の方向性、話題の移り変わり、話順の移行という三点を判断基準として下位分類を行った。本来、発話権利という概念は、普通、同時に二人が話すことはないという Sacks の原則を根拠にし、話順と発話権利を同じ概念として見なした立場から出発したものである。それは、話順の変更は発話権の移行や剥奪を意味することになる立場である。しかし、自分の話が相手によって割り込まれたり、途切れたりしたからといって、必ずしも妨害されたという不快感が与えられるわけではない。例えば、現在の話し手が必要とする単語や句を他の参加者が提供することで、現在の話し手の話順に合流したり、完成させるような割り込みなどは、形式的には発話の中断であるかも知れないが、求めている言葉が与えられることで会話が円滑に進められるようになる。つまり、現在の話し手の領域を侵害する意図ではないのである。発話権利というのは、会話参加者の意識による問題であって、発話を続け、発話目的を達成する権利、或いは、発話を実質的に途切れなく続けることを意味するものではない。発話権の脅かしは、それを判断し、受け入れ、反応する参加者の主観的なものである。従って、会話に現れる参加者の反応や言語行動のみを判断基準として、分析者が発話権の侵害に対する評価を下すのは類推に過ぎない危険なことであろう。

本稿では、会話に現れた参加者の事実上の言語的反応や言語行動のみに頼り、1) 話順移行の有無、2) 話題維持の可否、3) 話題方向性の一致可否という 3 つの判断基準を設けた。まず、話順移行の有無を基準に発話を単位化して整理し、次に、重ねた発話の話題が先行発話のそれと同じで発話目的の達成に沿っているかどうかを見た。そして、発話の流れから重なり後の発話を受け入れているか、それとも自分の発話をすぐに続けているかを見た。この 3 つの観点で、先行発話と重なりが協力的な関係にあるか、主導的關係にあるかが判断できる。このような判断基準で行った重なりの下位分類を表 1 に示した。

表1 重なりの分類



#### 4.4 直接的重なり

言及のとおり、直接的重なりは、会話の中で明らかな影響を与え、会話の進行に比較的強力に働きかける類型を指す。この類の重なりには、友好的かつ協力的に働くものと積極的かつ活発的に働くものがある。

##### 4.4.1 友好的重なり

友好的重なりとは、主に発話の付随的な表現に発生し、後行発話者が既に先行発話者の情報を理解・予期した上で生起するものである。例えば、電話開始部において自分が誰であるか相手の認識を支援する時、相手が遠慮からためらいがちな時や言いよどむ時、相手の話を傾聴し、よく理解しているからこそ可能な先取りの時、返答を早く返すことによって相手に安心感を与える時、共感・同意・確認・理解・承認・納得・驚き・感心などを積極的に表明する時などに生じるものである。それゆえ、この類の重なりは相手配慮性や相互協力性などで記述できよう。

- 1) A:がんばって ||<sup>3</sup>ね  
B: うんうん、ありがとう
- 2) 1A: 그러니까 내가 노동하지 || 않고 말이야 (だから、私が働きもしないでさ)  
1B: 그래 그래 응응 (そうそう、うんうん)  
2A: 그러니까 손도 안대고 롤루랄라 놀러다니다가 먹기만 먹는다 그 애기잖아

<sup>3</sup> || : このマークの位置で、後行発話と重なることを意味する。

지금 (だから、手も出さないで散々遊びまわっというて、食べるだけ食べるっていうことで  
しょう、今)

3) 1A: 쫀얏 먹어봤니? (胡麻の葉、食べてみた?)

1B: 아 그래 쫀얏 (あ、そう、胡麻の葉)

2A: ㄹ 맛어 어땀어? (味、どうだった?)

2B: 되게 맛있드라 (すごい美味しかったよ)

例 1) は、先行発話の末尾で後行発話が開始された例で、日本語の場合、文末詞の中でも自己主張のニュアンスが強く、相手の反応を確かめながら話を進めるという表現性の乏しい「よ」よりは、共感、確認、同意などを表すような「ね」や「な」系の文末詞において重なりがよく生じる傾向があるように思われる<sup>4</sup>。例 1) のような挨拶表現や決り文句など、儀礼性の高い表現は重なることが多い。末尾促進型は、先行発話の話題と結束性が高いために、先行発話との方向性不一致の恐れは比較的少ない。そして、後行発話者によって新しい話題が導入されても順調な役割交換が成される。例 2) は、先行発話の途中で後行発話が重なった例で、先行発話の十分な理解の上での早期反応が原因で起こる重なりである。例 3) は、先行発話と後行発話が同時に開始され重なった例である。このような促進型は、相手から話順を取り、自己選択することを目的としているわけではなく、相手の発話を尊重しつつ、先を予想し、援助することを目的としている。

#### 4.4.2 積極的重なり

友好的重なりとは違って、相手から話順を取り、自分の意見を述べたり、相手の発話内容に対して否定・不同意を積極的に述べたり、相手の発話との直接的な関連性のない新話題を持ち込み、関連質問をしたり、思いついた話を活発に切り出したりするなど、話題の展開を導くものである。話題の内容を強制的に変え、話し手-聞き手の役割が強制的に入れ替わるなど、強制性の強い傾向にあるが、結果的に参加者にとって話題拡張や幅広い情報の共有など、会話にはプラスに働くものと考えられる。

1) 1A: 병원 갔다가 진찰 받구 그러구 왔지 뭐 (病院行って診察受けて、それから帰ってきたの)

1B: 어 그랬구나 (あ、そう)

2A: 한 세시, 두시, 세시에 집에 왔나 (3時か2時、3時に家へ帰ってきたのかな)

2B: 어 그랬구 ㄹ 나 (あ、そう)

3A: 밥 먹었어? (ご飯、食べた?)

<sup>4</sup> 黒崎 (1987) では、談話中の間投詞的文末詞「ナ」「ネ」「ノ」「ヨ」の使用頻度と相づちとの呼応率を調べた。その結果、「ネ」との呼応率が60%で最も高く、「ナ」は44.7%、「ヨ」は42.1%、「ノ」は30.8%の相づち呼応率を占めている。

- 2) 1B:ね、ね、子供預けて、遊びに行こう  
 1A:名古屋に子供預けて?  
 2B: あ、そういえば、すごい台風だよ  
 2A: そうそう、びっくりしたー
- 3) 1A:今度から男女共学になるってよ  
 1B:つってね、ゆってたね  
 2A:びっくりし  
 2B: 今度からっていつから、来年から?  
 3A:来年からじゃないの?

例1) は、末尾型の重なりで、先行発話の話題と結束性のない意見や質問を投げかけ、新しい話題を提示している。2A の新話題導入は、前話題の一段落の終了を意味する 1B のあいつちに対して、沈黙を最小化することによって、自然に話順を相手に移行させており、会話の進行を主導する働きかけをする。例2) は割り込み型の重なり、例3) は同時型重なりで、両方ともに、B によって話題が拡張されているが、A は B によって持ち出された新話題を受け入れ、強い共感や同意を示している。

#### 4.5 間接的重なり

直接的重なりが会話の中で明らかな影響を与え、会話の進行に比較的強力に働きかけるのに対し、間接的重なりは、会話の中で積極的な働きかけはせず、ひそかに役割や話題の内容及び方向を維持しようとする弱協力的な目的性を持つ類型である。

##### 4.5.1 維持型重なり

維持型重なりは、言及のように話題が変わることや役割関係の移行などはなく、話し手の発話の継続・保持的な性格のものである。参加者は、互いの発話意思や意図に強く影響し合うこともなく、相づちなどで一旦途切れた話題や話順も重なりによって、修復される。

- 1) 1A:あと、2週間もない、あと十日ぐらい  
 1B:あ、そうなの  
 2A: なんだけど、
- 2) 1A:종로는 괜찮지만 이태원은 좀 (鐘路はいいけど、利太院はちょっと)  
 1B:거긴 좀 괜찮다 (あそこは、ちょっと、そうね)  
 2A: 가기도 그렇고 이상한 동네야 (行くのもあれだし、変なところでしょ)
- 3) 1A:ねえ、今、すごくバタバタしてさ  
 1B:うん  
 2A: もう、なんか、うち、十六日

2B: ㉠うん

3A: ㉡に引っ越すことになってさ

例 1) から例 3) は、話し続けようとする話し手としての意識が反映されている。また、聞き手もそういった話し手の意思を妨害しようともしない。互いの役割を保持しつづけるものである。言い換えると、促進型や強制型が持つ積極的で明らかな目的性はないものとして、参加者間における間接的な目的性を持つ。特に、話し手志向的な性格を考慮すると、弱主導的な目的性が読み取れるものであろう。

#### 4.5.2 中立型重なり

中立型重なりは、重なりそのものが会話の流れや進行に何らの影響も与えないものとして考えてよいだろう。現在の話し手が発話を継続している間、聞き手によって挿入される短い発話で、応答詞、感動詞、先行発話のオーム返しなど、会話への実質的な働きかけがないものである。そこに重なりがあってもなくても会話の進行には何の支障も起こさないために、働きの面では無標に近いものと考えられる。このような重なりは、単に聞き手の意識によるものとして、話順や話題を維持したり、展開するような目的もなく、話の流れに肯定的影響も否定的影響も与えない中立的な性格のもので、参加者間の支援性や会話参加の積極性は、維持型重なりより一層弱いと思われる。

1) 1A:우리끼리, 희진 ㉠이 (私たちだけ、ヒジン)

1B: ㉡응 (うん)

2A:하고 수진이하고는 그냥 나왔어 (とスジンとはそのまま出てきたの)

2) 1A:어우 그래갔구 우리 남편이랑 ㉠이건 뭐냐 도대체

(まあ、それでね、うちの主人と これはなんなの、一体)

1B: ㉡응 (うん)

2A:이러면서 하여튼 그랬다 아휴 (って言いながら、とにかく、ま、そうだったのよ)

3) 1A:十月は、ちょっと取れそうにないって

1B: ねえ

2A: ㉠言われたから

2B: うん

3A:ちょっと残念だったね

例 1) は先行発話の末尾で、例 2) は先行発話の途中で、例 3) は先行発話と同時に重なりが生じた例である。三例ともに、単に相手の話を傾聴していることを示す自発的相づちによる重なりで、聞き手志向的なものに過ぎない。



#### 4.6 重なりの全体的傾向

これまでに述べてきた重なりの全体的傾向を示したのが表2である。

表2 重なりの類型と特性

友好・協力・相手配慮性		→		活発・積極・主導性	
直接的重なり	間接的重なり	間接的重なり	直接的重なり		
友好的重なり	中立型	維持型	積極的重なり		
促進型			強制型		
強	弱	弱	強		

表2に記したように、表の左側の類型は相互協力性、相手配慮性の特徴がより強い。それに対して、表の右側の類型は、活発性、積極性、主導性がより強い。しかし、この表で示している二通りの概念は、両極に対立している概念ではないことを断っておきたい。友好・協力性を強く表す促進型重なりを出発点とすると、中立型は積極的な影響を与えず弱友好性を持つものであり、維持型はそれよりも友好・協力的働きが一段弱くなる。ところが、維持型は、促進型や中立型に比べ、活発・積極性がやや高まった働きかけをし、強制型重なりになると、友好・協力性は最も弱くなるが、活発・積極性は最も強くなることを示唆している。この関係性は、反対側からも同様の傾向が言えるものである。

#### 5. 日本語と韓国語の重なり<sup>6</sup>

これまでの枠組みを踏まえた上で、以下では、日本語と韓国語の重なりの体系を比較した結果及び考察を述べよう。日本語資料は、総計8件の会話で、総発話数は1946発話、そのうち、発話が重なった回数は439回で、約23%の割合で重なりが生起している。韓国語の資料は、総計5件の会話で、総発話数は2394発話、そのうち、発話の重なり数は407回で、約17%の割合を占めている。結果的に、韓国語の重なりがやや少ない傾向にある。これについては、会話の構成単位として見なしている一発話の交代速度との関わりが類推される。日本語の一発話当たりの平均所要時間は、約1.56秒、韓国語の一発話当たりの平均所要時間は、約2.04秒である。換言すれば、日本語は1分間38発話が話され、韓国語は29発話が話されたことになる。つまり、日本語が韓国語に比べて発話のやり取り、話順

<sup>6</sup> 日本語と韓国語の重なりの割合 (%)

	促進型		中立型		維持型		強制型		合計	
末尾型	14%	10%	7%	1%	3%	8%	7%	6%	31%	26%
割り込み型	17%	26%	4%	2%	2%	6%	13%	22%	37%	68%
同時型	13%	0%	2%	0%	17%	13%	10%	3%	32%	16%
合計	34%	36%	13%	3%	22%	29%	30%	32%	100%	

の取り合いが短い間隔で行われたのであろう。日本語の重なり率が韓国語の重なり率を上回る結果となったのは、話順取り合いの速度と対応している結果であるかも知れない。

次に、重なる位置による分類を比較してみよう。日本語 (J) と韓国語 (K) の相違を図 1 に示した。日本語の場合、「末尾型」31%、「割り込み型」37%、「同時型」32%を占めて

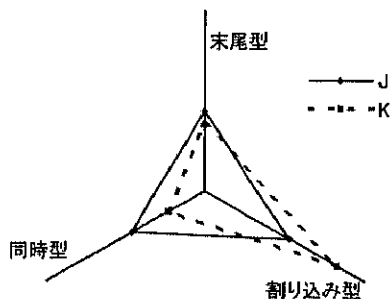


図1 位置による分類の日・韓比較

韓国語の「同時型」は日本語の「同時型」の半分しか占めていない。日本語母語話者の重なるの形態には、際立つ傾向というものは見られないが、韓国語母語話者の重なりは、相手の発話の途中で発話を開始し、重なる傾向が極めて強い傾向がある。また、この結果から当てはまる事実として、両言語ともに、話し手の話の終了を待ち、聞き手がそれを受け次ぐという単純で一定した話順の交換ではなく、より複雑な様相の重なりパターンを示していることが挙げられる。

図 2 は、両言語における重なるの働き傾向を比較するためのものである。日本語 (J) の場合、「中立」が 13% で最も低く、「促進」34%、「強制」30%、「維持」22% の順で割合を

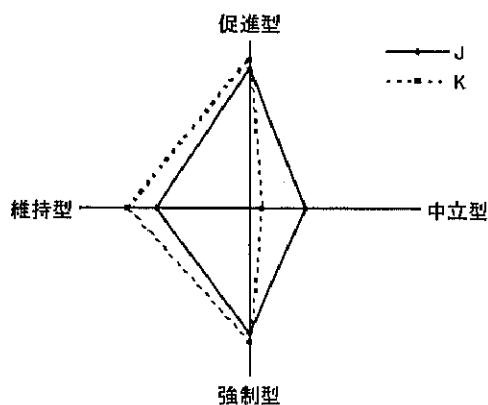


図2 働きによる分類の日・韓比較

おり、「割り込み型」の出現が「同時型」や「末尾型」を若干上回るものの、その割合に際立つ差はない。つまり、「末尾型」「同時型」「割り込み型」の重なりがほぼ均等に現れたことを指す。一方、韓国語の場合は、「末尾型」26%、「割り込み型」58%、「同時型」16%で、「割り込み型」の割合が遙かに高く、「末尾型」のほぼ 2 倍以上、「同時型」の 4 倍近くを占めている。それに対し、

韓国語 (K) の場合、「中立」が 3% で日本語の「中立」の半分以下であり、最も低く、「促進」36%、「強制」32%、「維持」29% の順であった。両言語共に、「促進」の働きを担う重なるの割合が最も高く、「強制」>「維持」>「中立」の順で割合が低くなるという概ね同様の傾向を示すが、詳細を見ると相違が目立つ。図 2 からわかるように、重なるの分布を示す図形を見ると、両言語ともに、縦軸方向の領域が横軸方向の領域に比べ、より広がっている。促進型と強制型で記されている

縦軸は、直接的重なりであり、維持型と中立型で記されている横軸は、間接的重なりで

ある。つまり、日本語と韓国語の重なりは、会話の中で、直接的な影響を及ぼしていること、特に友好的に働く傾向にあること、そして、間接的に影響を及ぼす場合でも弱友好的な働きかけよりは、比較的積極的な働きかけをしていることが言える。ところが、横軸を中心に相違が見られる。中立型の分布において、日本語に比べ、韓国語の方が著しい左寄りの分布を表しており、間接的重なりの中でも弱友好的な傾向を示す中立型の分布が非常に低い。要するに、韓国語の場合、積極的に働きかける重なりの方により傾いていることを指す。

図3は、重なり全体の傾向を比較したものである。まず、全体的な分布から言うと、韓国語の重なりがやや複雑な様相を呈している。言及のように、直接的重なりは、友好・協力的重なりと、活発・積極的な重なりによって構成されている。まず、図3の円グラフの中心から上下分布を考察することにしよう。上半部が直接的重なり、つまり友好性の「強」

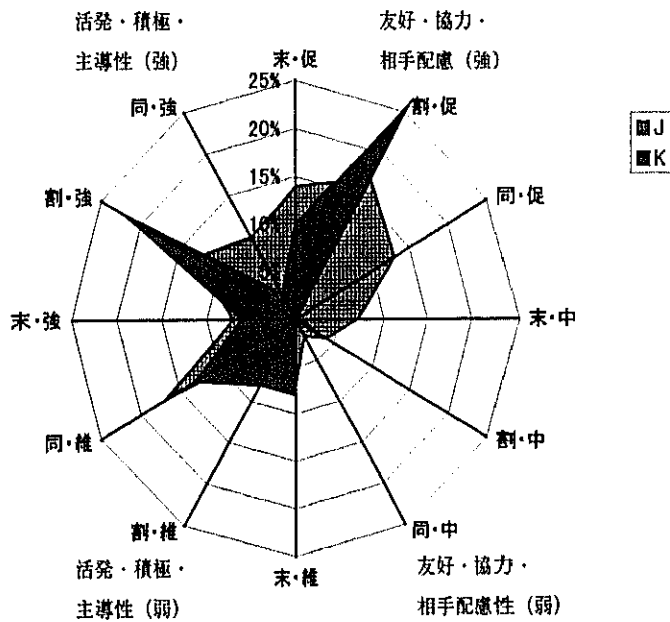


図3 日・韓語の重なり傾向

と積極性の「強」に当たる。そして、中立型と維持型に構成されている間接的重なり、つまり、友好性の「弱」と積極性の「弱」は下半部に当てはまる。図3からもわかるように、両言語ともに下半部を占める領域はそれほど広くない。これは上半部：下半部を占める領域の割合で比べるとより正確にわかる。日本語の場合、上半部：下半部を占める領域の割

合は約 6 : 4、韓国語の場合は約 8 : 2 である<sup>6</sup>。ということは、両言語ともに、重なるのコミュニケーションへの影響は直接的で「強」なものであることを示唆するのであろう。そして、上に示した割合を見る限り、韓国語における重なるのコミュニケーションへの影響力が日本語に比べ、より強く、直接的であるのではないと思われる。

次に、左右分布を調べてみよう。右半部は促進型と中立型、左半部は強制型と維持型で構成されている。促進型と中立型は、友好性や相手配慮性として記述される類型であり、強制型と維持型は、積極性や主導性として記述される類型である。日本語の場合、右半部と左半部領域の分布割合は約 5 : 4 で、右半部における分布が左半部における分布より若干広い。ところが、分布にばらつきが見られる韓国語の場合約 4 : 5 であり、日本語の傾向とは反対の結果で、左半部における分布が右半部における分布より若干広い<sup>7</sup>。即ち、日本語の重なりは友好的かつ協力的に働く重なりが若干優位であるが、韓国語の重なりは、積極的かつ主導的な働きが若干優位であることがわかる。

さらに、韓国語の分布におけるばらつきを調べると、際立っている分布は割り込み促進型 (26%) と割り込み強制型 (22%) である。つまり、韓国語母語話者にとって相手の発話に割り込んで発話が重なるという行為は、結果的に相手の発話に対して促進的な働きかけをしている場合が最も多く、その次に多いのは、会話を積極的かつ主導的に導く場合であることがわかる。

以上、日本語と韓国語における重なるの考察結果をまとめると、以下のようなことが言えるのではないと思われる。

- 1) 重なる位置による分類において、日本語は「末尾型」「割り込み型」「同時型」にほぼ均等な重なりが生じている。一方、韓国語は、「割り込み型」の発生が際立つが、それは、相手の発話に対して促進的な働きかけか、会話を積極的かつ主導的に導く働きをしている。
- 2) 両言語ともに、会話の中で重なりが直接的な影響を及ぼし、友好的に働く傾向にあることについては概ね同様であるが、間接的重なるの場合においては、韓国語の方が比較的に積極的な働きかけをしている。
- 3) 日本語に比べ、韓国語における重なるのコミュニケーションへの影響力はやや強く、直接的である。そして、日本語の場合は、友好的かつ協力的に働く重なりが若干優勢で、韓国語の重なりは、積極的かつ主導的な働きが若干優勢である。

<sup>6</sup> 円グラフに現れた両言語における分布領域の比較には、便宜上、1%を数字単位の1と見なした上で三角形の面積を算出し、それを領域ごとに合わせたものを用いた。因みに日本語の場合、上半部の面積は 227.75 で、下半部の面積は 51.75 であった。一方、韓国語の場合、上半部の面積は 92.3 で、下半部の面積は 51.5 であった。

<sup>7</sup> 日本語の場合、右半部の面積は 148.75 で、左半部の面積は 130.75 であった。一方、韓国語の場合、右半部の面積は 65.5 で、左半部の面積は 78.3 であった。

## 6. 終わりに

これまでに、重なりの分類別特徴を話順や話題の方向性という要素を踏まえながら考察を行ってきた。そして、その分類をもとに、日・韓語間の異同を検討した。

その結果、重なりは会話の中で直接的に働きかけるものと間接的に働きかけるものがあり、さらに、友好・協力的に働く重なりや活発・積極的に働く重なりなどがあることを提示した。そして、重なりのコミュニケーションへの影響に対しては、否定的・肯定的という対立的なものではないことを同時に示した。

日本語と韓国語における重なりについて、全体的な傾向は概ね同様ではあるが、韓国語の場合、割り込み型重なりの出現が際立っていること、そして、その割り込み型重なりは、主に相手の発話に協力的に働くものであることが確認できた。また、日本語の重なりは相手配慮性や友好性がより強く、韓国語の重なりは主導性や積極性がより強い傾向に働くことを明らかにした。

このような重なりの対照研究が、コミュニケーション参加者の姿勢や態度の違いを明らかにする一つの資料となり、両言語における母語話者間の相互作用が有効に把握できる一つの土台となることを期待しながら、今後、重なりをめぐる言語形式及び他の言語学的要素による多角的な下位分類を通したより精密な研究の拡大を課題としたい。

### 【参考文献】

- 今石幸子 (1993) 「聞き手の行動—あいづちの規定条件—」『阪大日本語研究』5
- 今石幸子 (1994) 「話し手の発話とあいづちの関係について」『大阪大学 日文学報』13
- 岡本能理子 (1990) 「電話による会話終結の研究」『日本語教育』72
- 黒崎良昭 (1987) 「談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野地方について—」『国語学』150
- 杉戸清樹 (1987) 「発話のうけつき」『談話行動の諸相—座談資料の分析—』国立国語研究所編 三省堂
- 西原鈴子 (1991) 「会話の turn-taking における日常的推論」『日本語学』10-10
- 都恩珍(印刷中) 「日本語の電話会話における重なりについて」『言語学論叢』20 筑波大学
- 藤井桂子 (1995) 「発話の重なりについて—分類の試み—」『日本文化と日本語教育』7 お茶の水女子大学
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 松田陽子 (1988) 「対託の日本語教育学—あいづちに関連して」『日本語学』7-13
- 水谷信子 (1983) 「言いよどみ」『話しことばの表現』筑摩書房
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』7-13
- 水谷信子 (2001) 「相づちとポーズの心理学」『言語』30-7
- メイナード・泉子 (1987) 「日米会話におけるあいづち表現」『言語』16-11
- 山崎敏一・好井祐明 (1984) 「対話の順番取りシステム—エスノメソドロジーへの招待」『言語』13-7

- 好井裕明・山田富秋・西阪仰編 (1999) 『会話分析への招待』 世界思想社
- 吉田智子 (1989) 「発話の重なり現象の考察—電話会話の分析—」 日本語教育論集：国立国語研究所報告 6
- レヴィンソン (1990) 『英語語用論』 安井稔・奥田夏子訳 研究社
- Goldberg, J.A. 1990. Interrupting the discourse on interruptions, *Journal of Pragmatics* 14, 883-903
- Sacks, Harvey, Schegloff, E.A. and Jefferson, G. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, 4, 696-735
- Schegloff, Emanuel A. 1968. Sequencing in conversational opening. *American Anthropologist*, 70, 6, 1075-1095.
- Schegloff, Emanuel A. & Harvey Sacks, 1973. Opening up closings. *Semiotica*, 8, 289-327
- Tannen, Deborah. 1984. *Conversational style: Analyzing talk among friends* Norwood, N.J.: Ablex